安曇野市公民館報

安曇野市
中央公民館
No.48 2019.5.22
TEL71-2466

穂高公民館

早春弦楽コンサート

穂高公民館は3月17日、早春弦楽コンサートを穂高会館講堂にて開催し、60人が鑑賞した。

演奏者は、「みさとドルチェ」、弦楽アンサンブル「リアン」の2組で、計20曲を演奏した。

みさとドルチェはバイオリンを佐々木孝子さん、チェロを鈴木美恵子さん、ピアノを降幡かほるさんが担当するトリオで、全員が三郷在住だ。リアンはみさとドルチェの佐々木さん、鈴木さんに、石原雅巳さん、波多野太さんが加わり、バイオリン2人、チェロ&ギターという少し変わった構成のカルテットである。どちらも普段は老人ホームや児童館などで演奏活動をしている。

この日の演奏はパッヘルベルの「カノン」から始まった。曲の紹介を挟みながら、「宇宙戦艦ヤマト」「星に願いを」ビートルズの「イエスタデイ」などの親しみやすい曲が次々と披露された。また唯一のオリジナル曲「夢の水辺」は、波多野さんがインフルエンザの闘病中にアイデアが湧いて作曲したとのことで好評であった。

他にも「上を向いて歩こう」「瀬戸の花嫁」「花は咲く」「ダンシングクイーン」などの曲が演奏され、会場は盛り上がった。最後に「情熱大陸」、アンコール曲「故郷」で惜しまれながらも幕を下ろした。

感想に「曲目がバラエティーに富んでいて大変良かった」「きれいな曲や、楽しい曲、軽快な曲とたくさん演奏してもらい時を忘れて楽しめた」「豆知識風の曲紹介が良かった」「心に染み入る音色に温もりを感じ、ほのぼのとしてうれしかった」などの声が聞かれた。

堀金公民館

満蒙開拓に学ぶ

堀金公民館は3月21日、同館で講座「満蒙開拓に学ぶ」を開催し90人余りが参加した。講座は2部構成で、第1部は満蒙開拓青年義勇隊として満州に渡った堀金の内田辰男さん（90）による体験談「戦後を生き抜いて」の講演を、第2部は内田さんを含め「ふれあい友好訪中の旅」に参加した5人による「満蒙開拓の現地を訪れて」のパネルディスカッションを行った。

内田さんは、旧国民学校高等科卒業と同時に昭和18（1943）年3月、14歳で満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に入所し、6カ月後「満蒙開拓青年義勇隊」として満州に渡った。耕地が少なく働く場所のなかった農家の次男には、土地が与えられる魅力があり、大農家への憧れがあった。また、入隊のきっかけとなる進路決定の時点では、満蒙開拓は国策で、当時の学校や南安曇郡でも奨励していたこと、軍国主義の教育の中で意気盛んだったこともあるという。

満州の満蒙開拓青年義勇隊訓練所に入所し、開拓と兵役訓練、工場勤務の中、終戦直後の昭和20（1945）年8月20日、旧ソ連軍が侵攻してきた。以後、飢えと寒さに耐え、麻袋を着たり、現地の人に助けられたりしながら1年2カ月ほどに及ぶ辛酸な生活を送った。翌年10月に帰郷できたが、戦争の悲惨さと平和の尊さを身をもって体験した。

第2部のパネルディスカッションは、昭和63（1988）年以来、長野県開拓自興会として30年に渡り友好訪中を続けてきた内田さんを始め、モデレーター（司会役）に平倉勝美さん、パネリストに堀金の百瀬新治さん、山田清一さん、穂高の曽根原雪子さんを迎え、同行訪中して現地で近代史を見てきた経験を持つパネリストによる報告・討議や、来場者との質疑応答を行った。

パネリストは、いまだに危うい世界情勢が続く現状を引き合いに、残留者、遺族、取り返せない青春時代や思いなど、まだ終結したと言いきれない過去の歴史から学ぶ重要性を訴えていた。

第8回安曇野市総合芸術展

今回で8回目となる安曇野市総合芸術展が3月7日から20日までの2週間、豊科交流学習センター「きぼう」2階の多目的交流ホールで開催された。

書道や彫刻、工芸、写真、絵画、水墨画の111作品が並んだ。昨年秋に市内各地域で開催された文化祭などに出品されたものの中から選ばれたもので、どれも力作ぞろいである。

訪れた人々は、ひとつひとつの作品に足を止め、作品名と作者名を見ながら、時間をかけて作品を楽しんでいる様子だった。つまようじ約8300本と生花等を使って、市内の有名建築物「鐘の鳴る丘集会所」を模した作品の前では「よくだねぇ、細かいとこまで、まていにしてあるわ」「つまようじでこさえてあるわ。時間かかってるね」など、その出来栄えに感嘆していた。

最初の週末となった9日と10日には、あづみ野ビデオクラブによる25作品の映像上映も行われた。自分たちで撮影、編集し、音楽やナレーションも加えた映像は、創意工夫がされていて時間を忘れて見入ってしまう。クラブメンバー自身の白馬などへの撮影旅行の様子も映され、熱心さが伝わった。メンバーも募集中とのこと、興味のある方はぜひ挑戦してほしい。

隣接する豊科近代美術館では、友の会絵画部の作品展が同時期に開催され、大作の数々を見ることができた。気軽に芸術に触れる機会があるのは、とてもありがたい。

地区公民館だより

等々力地区公民館（穂高）

等々力地区は、御法田の西、国道147号線の東、穂高川の南の間で、大きな下駄がある東光寺や本陣等々力家、こねこねハウスなどがあるあたり、といえば分かってもらえるだろうか。世帯数は200を少し上回る規模だ。

役員は、三役、体育部、女性部、文化部が2年、育成部が1年の任期でそれぞれの行事を計画、推進している。もちろん役員全員が力を合わせていることは言うまでもない。

体育部は、公民館対抗のソフトボール・バレーボール大会とソフトバレーボール大会、運動会、ボーリング大会を担当する。昨年の運動会は、神田町からの来賓も一緒に、初秋の空の下、子どもたちの進行で約80人の参加者が汗を流しながら応援したりされたり、自己紹介しあったりと親睦を深めた。

次に女性部は、料理教室と餅つき大会、フラワーアレンジメント教室を担当する。餅つき大会では、おそるおそる杵を持つ子どもと、それを支える大人との温かい交流や、つきたての餅を頬張る老若男女の笑顔が、地域の絆を感じさせる。

そして文化部は、人権研修会と公民館だよりを担当する。昨年の研修は「発達障がいの理解と支援」というテーマで多様性を尊重し合う共生社会のありようを学び、4回発行された公民館だよりは、活動をより身近なものにしてくれた。

最後に育成部は、小、中学校それぞれの代表が役員として参加し、わさび祭り、納涼祭、餅つき大会、三九郎等で子どもに関わる部分を担当する。特に、わさび祭りの子どもの参加数の多さとかけ声の大きさは圧巻だった。自然にそういう雰囲気を作る地域のまとまりを誇らしく思う。

このように各行事への子どもの参加が多く、活動が地域の子育てにも繋がっていることを実感する。その姿は、彼らが地域に根を張り、たくましく次代を担ってくれるであろう事を期待させるものである。

いずれの活動も住民が主体的に参加し、それを役員がまとめ、交流と親睦を図る大切な機会となっている。今後も役員一同、力を合わせて活動を充実させていきたい。（等々力地区公民館長　神谷哲彦）

古きを尋ねて

㉛接吻（せっぷん）道祖神（明科・池桜）

市の有形文化財に指定されている明科東川手池桜の接吻道祖神。国道403号を筑北村方面へ向かい、矢越トンネルの約1キロ手前で左に折れる山道を歩いて約15分登ると、ケヤキ林に囲まれた墓地の一角にひっそりとたたずむ道祖神が見える。像高は55センチと小ぶりのつくりで、市教育委員会が設置した案内看板によれば、「江戸中期の作とされているが、形態からして江戸後期の作と思われる」とある。

明科地域には150体近くの道祖神が確認されているが、接吻像は珍しい。県内でも特色のあるものとして有名で、昭和27（1952）年の郡誌編纂会モデル調査の際に、学者に注目され、パリの拓本展にも出品され注目を集めた。

昭和30（1955）年頃まで池桜に住んでいた三好正志さん（現在明科宮中区在住）は当時の思い出を次のように語っている。

「中学生の頃まで池桜にいた。当時は21戸の世帯があったが、今は2軒しか住んでないね。さみしくなってしまった。私は6人兄弟だが、どこの家も子どもがたくさんいてにぎやかだった。あの道祖神は当時から県内でも有名でね、バスで見に来る団体客も大勢いた。いちばん楽しい思い出は三九郎かな。大人が山から丸太を伐り出し竹で組んで道祖神の前に今の倍以上の三九郎を作ってくれた。2つの集落で1本ずつ作り、夕方になると火をつけ、みんなで輪になって餅を焼いて食べた。今でも天まで昇る雄大な炎を思い出すね。どこの家とも行き来があり、あの道祖神のようにみんな仲良く暮らしていた」

三好さんが池桜を去って60年余り。時は流れ幾多の変遷を経た今もなお、接吻道祖神は仲睦まじく、地域の行く末を見守っている。

なお、龍門渕公園にはこのレプリカがある。昭和62（1987）年に旧明科町商工会によって設置され、訪れる人々の目を楽しませている。こちらは像高が1メートルあり、オリジナルよりかなり大きい。

グループ紹介

三郷小菊盆栽会（三郷）

「三郷小菊盆栽会」は、三郷地域の小菊盆栽を愛好する仲間が集まって小菊盆栽会を作り30年ほど前から活動している。会員は現在9人で70歳代が多く、限定したわけではないが全員女性である。小菊盆栽の育成にあたり、堀金の黒岩宏成さんに指導をお願いし、盆栽の数や、苗の種類、花の色、大きさや形、難しさなど、それぞれに合った作品に取り組み、三郷菊花展に出品している。

小菊盆栽会としての活動期間は3月から10月の間で、月1回、午後1時から午後3時まで三郷下長尾公民館に集まり、作品を持ち寄って完成に向け育てている。冬季間は、各家庭で越冬保存し、春になって芽が出るように管理する。小菊作りは、前年7月の「さし芽」から始まり1年以上、手入れをして出来上がる。良い冬至芽（とうじめ）ができるように、活動期間外の家庭における冬場の管理も大切である。

小菊の生命力は非常に強く、6年を超える古木からも芽を出し、仕立てれば花を咲かせるので捨てることが出来ない。根も太く、苔も生えて違った趣がある。

小菊盆栽の愛好者は、育てる楽しさと咲かせた喜びにやりがいを感じている。小菊盆栽の育成にはいくつかの方法があり、新しくさし芽から育てる方法と、古木から新芽を育てる方法で異なった作品になる。樹形は1本の単幹、2本の双幹、五幹とあり、古木に根を張らす「木付け」や岩に根を張る「石付け」、何本もの菊を1列に並べる「根連なり」などさまざまで、奥が深い。

猛暑や、長雨による日照不足などで菊の成長に影響が出るが、農作業の合間に小菊の前に座って芽を摘み、針金を巻いていると、時間の経つのも忘れるほど夢中になり、いつか癒やされている自分に気が付く。小菊盆栽づくりの活動の中で、気のおけない仲間たちとお茶を飲んだり、世間話にも花が咲いて、日々を楽しんでいる。（東山路）

（代表・甕　登美、連絡先・三郷公民館　電話77-2109）

みちしるべ こうみんかん

あかしな

楽しいズンバ教室

明科公民館は3月7日と14日、「楽しいズンバ講座」を開催し、延べ26人が参加した。

ズンバとは南米で誕生したラテン系のフィットネスで、アップテンポの曲に合わせて踊ることで健康増進やダイエットに効果があるとされる。講師はズンバインストラクターの上野千奈美さん。7年前マレーシアで資格を取得して以来ズンバを続け、自身のシェイプアップや体質改善に繋がったという。

参加者はJポップやロック、ラテンのリズムに乗って思い思いに体を動かして楽しんでいた。2人の子と一緒に参加した中沢春代さんは「あっという間に汗だくになった。楽しかったけど最後は足がもつれた」と語った。

とよしな

高校演劇合同発表会

豊科公民館大ホールでは2月11日、「高校演劇合同発表会」が開催された。

この発表会は、高校の演劇部員が音響・照明・舞台の演出等すべて自分たちで行い、近隣の高校演劇部同士が学び合い交流している。

今回は、市内4校と白馬高校、大町岳陽高校の計6校が参加した。部員数は少ないが、全員が協力しさわやかな演劇を披露した。

みさと

冬季スポーツ大会

三郷公民館は2月17日、恒例の「三郷地域地区公民館冬季スポーツ大会」を三郷体育館と三郷小学校体育館で開催し、14地区公民館から計28チームが参加し、熱戦を繰り広げた。

種目は、ワンバウンドふらば～るバレー（男女混合5人制）で、三郷公民館適用ルールによって、進行された。各チームの選手たちは、当初ボールの扱いがぎこちなかったが、試合が進むにつれスムーズなものになっていった。それとともに、どのコートにも「ナイス！」「ドンマイ」「よーし」「やったー」などの声が響き渡り、選手も応援団も言葉を交わし認め合い、心のつながりを深めていった。

三郷体育館は二木地区が、三郷小学校体育館は楡地区がそれぞれ栄冠を勝ち取った。

ほりがね

学びのつどい

堀金公民館は3月2日、学びのつどい・フルートコンサートを堀金体育館サブアリーナで開催し、約150人が来場した。

「フルート演奏と心温まるお話」をテーマに上田女子短期大学非常勤講師の杉山由一さんが、「野ばら」「別れても好きな人」「真田丸」のメインテーマなどをフルートで演奏し、柔らかな音色が会場を包み込んだ。また、曲にちなんだ心温まるお話を交えての演奏で、楽しいひとときとなった。最後には全員で「故郷」を大合唱し、歌声が会場いっぱいに響き渡った。

杉山さんは、穂高中学校の教頭を務めたことがあり、「安曇野は思い出がたくさんあるので懐かしい。また、この地でフルートを吹きたい」と話していた。

ほたか

季節の料理教室

穂高公民館は3月14日、Vif穂高ふれあい体験館において、季節の料理教室「やしょうま作り」体験教室を開催した。講師はVif穂高の寺口芳子さん、高橋和子さん、二木仁美さんで、20人が参加した。

やしょうまは、釈迦の入滅の日に供える涅槃（ねはん）団子で、その名称や形状は地域によって異なる。寺口さんの実演を交えサクラとツバキの2種類を作成し、棒状に伸ばした生地を糸で切ると、緻密で鮮やかな花のやしょうまができあがった。「近所で教わる事ができうれしい」との声があった。

欅

人工知能の発達が、ここ数年目覚ましい。人間とコンピューターの共存をどのように図っていくのか難しい課題である。人間の仕事が奪われてしまうのではないか？しかし、人手不足を補うには、人工知能を活用しなくては、解決しないだろう。どんな未来になるのだろうか？

（H・N）